

仏教文化公開講座講演録要旨

中世における臨終行儀と往生際の迎え方

——親鸞の往生際の文化的背景を中心に——

小山 聡子

はじめに

皆さん、こんにちは。小山聡子です。本日は、歴史学の立場から、中世において臨終行儀（臨終の作法）や往生際の迎え方はどう考えられたのか、親鸞の往生際の文化史的背景がどういふものなのかを、お話したいと思います。日本の臨終の作法を考えるときに、天台僧の源信（九四二―一〇一七年）の『往生要集』について検討することは欠かせません。『往生要集』をもとに、真言宗や、のちになると日蓮宗でも臨終行儀の作法を作っていくことは、天台宗の阿弥陀仏を本尊とした臨終行儀が記されている『往生要集』を真言宗で使うには本尊を変える必要があります。真言宗では、本尊を阿弥陀仏ではなく不動明王にし、「南無阿弥陀仏」ではなく、不動明王の真言を唱えます。そうではありますが、基本的には『往生要集』をもとに臨終を迎えようとしていました。

のちの人間は、源信の『往生要集』をどう解釈していか往生際を迎えようとしたのでしょうか。臨終行儀は宗派を超えて盛んに行われるようになります。源信の『往生要集』が出されたあとに、貴族も『往生要集』を書写して所持していました。のちに、藤原道長は藤原行成という能書家に写させて持っていました。道長も、臨終をどのように迎えるべきかを『往生要集』をもとに考えていたのです。

先ほど述べましたように、真言宗でも、『往生要集』をもとに臨終行儀書が作られました。浄土宗は宗派として公に認められるのはのちのことですが、法然の門弟は『往生要集』を参考にしたうえで臨終行儀書を作っています。さらに、のちに日蓮宗でも、「南無阿弥陀仏」ではなく「南無妙法蓮華経」に替えたいうえで、『往生要集』をもとに臨終行儀書を作っています。少なくとも、『往生要集』の影響を受けて臨終を迎えることは、近代の初めまでは行われていたと考えられます。

ただし、近代に入ればらくすると、さすがにもう行われなくなる傾向にあり、いろいろな史料を調べましたがあまりありませんでした。臨終のありように強いこだわりを持っていた有名な人物というと、宮沢賢治がいます。宮沢賢治は熱心な法華経信仰者であり、法華経信仰者としての臨終のありかたに強くこだわりました。『往生要集』が、日本人の臨終のあり方に与えた影響は本当に大きいと言えます。

そのような中で、のちに浄土真宗の開祖とされた親鸞は、「往生は臨終時に定まるのではなく阿弥陀仏から与えられた信心を得たその瞬間に定まるとし、真実の信心を得た者は臨終時まで待つ必要はないし、来迎を頼りにする必要もない」と述べてました。この時代において、これは革新的なことでした。なぜかという点、『往生要集』には、「臨終時の念仏は百年間の修行よりも勝る」と書いてあり、そのような認識が一般的だったからです。

百年間いろいろな修行をするよりも、臨終時の念仏のほうが重要だということが、『往生要集』に書かれています。

ただ、臨終時の念仏を一回唱えるということは、その前に信仰をしていないと、とてもできませんので、やはりあつた信仰心は必須です。

源信が、『往生要集』に示した臨終の作法が、中世には一般的な作法であり、近世になっても庶民の間で理想的な臨終のありかたとされていました。

そのような中で親鸞は、臨終行儀をするのは自力の行者であつて、信心を得て念仏を唱えている者には必要ないと述べました。親鸞のこのような教えは、当時においてどのように受容されたのでしょうか。『往生要集』の臨終行儀について概観したうえで、親鸞が生きた時代を中心に往生際の迎え方について、歴史学的な視点から考えていきます。

一・源信が説いた臨終行儀

源信は天台僧です。天台宗の総本山、比叡山の一番奥地に横川よかわという場所があります。鳥の囀りが心地良い所です。横川に行くといつも、源信はここで『往生要集』を書いたのだなと思ひながら歩いています。

横川の中心部から上がった所にある恵心堂で、源信は『往生要集』を執筆したと言われています。『往生要集』は、源信が自分の考えを書きつらねたものではなく、多くの經典や中国の僧の著作を引用して、どうすれば阿弥陀仏の極楽浄土に往生できるかを説いたものです。

一般的に『往生要集』というと、地獄のことが書かれていると考えられがちです。でも、これは地獄の描写が衝撃的だったからそう言われているだけで、源信は地獄について詳しく論じようとして『往生要集』を書いたのでは

ありません。地獄の箇所は、あくまでも導入部分です。

経典をもとに、阿弥陀仏を信仰しなかったり、殺生の罪を犯したりすると、こんなことになるという事例として、恐ろしい地獄のことが書かれました。結果として、地獄の箇所が衝撃的だったために注目され、『往生要集』といえば地獄、地獄といえば『往生要集』と言われるようになりました。

『往生要集』は、どうしたら極楽浄土に往生できるか、その方法が書かれた書物です。理想的な臨終について、『往生要集』には、「極楽浄土のある西に阿弥陀仏像を置き、その手に長い布をつなぎ、もう片方を病人が持つ。看病人は香をたき、花を撒き、病人を厳かに飾る」と書かれています。

ただし、阿弥陀仏像を臨終の場に用意するなどということは庶民にはできません。ただし、必ずしも像がないといけないということではありませんでした。臨終時に妄念が起きてはいけないので、集中して、極楽浄土や阿弥陀仏の来迎のことを考えて念仏を唱えれば極楽浄土に往生できると書いてあります。

『往生要集』には、阿弥陀仏や極楽浄土の姿を思い浮かべて念じ、心静かに集中して、十回念仏を唱える必要があると説かれています。そうすれば、阿弥陀仏が迎えに来てくれて、極楽浄土に往生できるとされています。

このように源信は、心を集中して十回念仏を唱える必要があるということを説きます。これが貴族に浸透し、貴族社会でもこのような臨終のあり方を目指すようになります。

『往生要集』完成の翌年（九八六年）には、源信を含め、比叡山横川の僧二十五名を構成員として二十五三昧会という会が発足しました。この会に入った人は、主に三つのことを行います。

一つ目は、毎月十五日の夕べに念仏三昧を修して臨終の十念を祈ることです。亡くなるときだけ念仏するのはなかなか難しいので、日頃から行うことが重要です。だから毎月十五日に集まって、夕方から念仏三昧を修し臨終

の十念ができるように祈ります。

二つ目に、臨終時には互いに助け合い励まし合って念仏に邁進することです。メンバーの誰かが亡くなるときには集まって、念仏を促します。念仏をして静かに息をひきとれるように助けます。

三つ目が、死後に極楽に往生したり、悪道に堕ちたりしたら、構成員に知らせることです。どうやって知らせるかと言うと、夢で告げることが多いです。誰かの夢に出てきて、「自分は極楽に往生できました」とか、「実は地獄に堕ちてしまいました」と告げる、要するに報告義務があります。

このように、二十五三昧会のメンバーは、毎月決められた日に集合して念仏すること、臨終時に助け合うこと、死後に報告することの三つを行う必要がありました。現在、夢というと現実社会とは直接かわらないものとして捉えるのが一般的ですが、この時代は、霊や神の夢告は、現在と比べるとリアリティーをもって受けとめられました。特に、その夢を同時に、二人、三人の者が見たととなると、真実味は増します。

二十五三昧会では、どうすれば往生できるかを調べ記録するということも行いました。構成員の臨終の記録は、『楞嚴院二十五三昧結縁過去帳』に記録されました。

ただし、『往生要集』は、書かれた当初から高い評価を受けたわけではありません。九八七年、源信が宋に送り『往生要集』は天台山国清寺に渡ります。国清寺は、かつて日本の天台宗開祖の最澄が学んだ地です。杭州の南に天台山があります。

この時代の船にはエンジンがないので、日本から船を出すと寧波^{ニンポ}とか、上海の南側に船が着くことが多く、それによって、日本の文化は特に中国の杭州の辺りの文化の影響をかなり受けているようです。

源信は天台僧ですから、最澄が勉強した天台山に送りたいと考えたのでしょう。そうしたところ、天台山の僧か

ら「天台山ではあなたが書いた『往生要集』が大変高く評価されています」と、絶賛する返事が届きました。日本では、その手紙が届いたことを理由に、『往生要集』は素晴らしいと、高く評価されるようになりました。つまり、中国で評価されたから高く評価されるようになったということです。ただ、天台山国清寺の僧の伝えたことが、本当だったかという点、実はこれは優しい嘘だったと思われます。のちに、日本の天台宗の僧侶が天台山に留学しますが、『往生要集』なんかどこにもないぞ」と言っているからです。要するに、高く評価されている、というのはお世辞だったわけです。それを日本では、真に受けたということです。

二、阿弥陀仏の救済への不安

次に、慶滋保胤の『日本往生極楽記』にある伝記を見ていききたいと思います。そもそも経典では、阿弥陀仏は慈悲深い仏であると強調されています。阿弥陀仏は必ず救ってくれるということを信じて念仏すれば、必ず極楽浄土に連れていくってくれると書かれています。阿弥陀仏はその慈悲深さを強調されて、篤く信仰されました。そして、信仰されればされるほど、「本当に阿弥陀仏は来迎してくれるのだろうか」という不安も強くなっていきます。この点を考えていくうえで、『日本往生極楽記』の尼某甲の伝記は面白いものです。

尼某甲は、大僧都寛忠の姉で、生涯結婚することなく仏門に入り、高齢になり衰えることすら阿弥陀仏を念じた、とあります。あるとき、尼は弟の僧都に、「明後日に極楽浄土にまいることになるでしょう。この間、不断念仏を行いたいと思います」と告げたそうです。自分の死ぬ日時を言い当てるのは往生できる証しだと考えられていました。寛忠は、大勢の僧侶に三日三晩、念仏三昧を行わせました。すると尼は、再び僧都に「西方から宝の輿

が飛んできて目の前にあります。ただし、仏と菩薩は濁穢じくえがあることを理由に帰ってしまいました」と言いながら涙を流しました。阿弥陀仏は慈悲深い仏のはずです。にもかかわらず、濁穢があることを理由に帰ってしまったそうです。阿弥陀仏は本当に極楽へ往生させてくれるのかという不安が生じていたために、このような伝記ができたものと考えられます。

ちなみにその後、僧都が諷誦ふうじゆを二回にわたり行ったところ、翌日になり、尼は「聖衆しやうじゆが再び来ました。私の往生の時が来たのです」と告げ、念仏をして入滅した、とされています。結局、尼はめでたく往生できたのですが、一度目の来迎の時には仏と菩薩が来たのに対し、二回目には聖衆が来たとされています。聖衆とは、阿弥陀仏のお使いの者たちです。つまり、僧都の諷誦により清浄になった後である二回目には、もう阿弥陀仏は来なかったということになるでしょう。

二十五三昧会の『首楞嚴院二十五三昧結縁過去帳』には、源信は死の直前であっても身に苦痛はなく、鼻毛を抜き、身と口を清め部屋の掃除もした、とあります。ここに書かれた源信の臨終のありようは、非常に不自然です。実は、源信のみではなく、往生伝に書かれている往生者の死に際は、「病氣になりました。治りました。死にました」というパターンが非常に多いです。「病氣になって治って死ぬ」というのは、どう考えてもおかしいですよ。普通は病氣になって死にます。なぜ治ったあと死んだとされたのかというと、死ぬときに苦しみが強いと往生できなかったと判断されたからです。だから、往生した人間は死ぬ前に「病氣が治り集中して念仏を唱えて死にました」とされることが非常に多いです。

面白いことに、源信は死ぬ前に鼻毛を抜いたとされています。なぜ抜いたと思いますか。これについては、鼻毛が生えていると阿弥陀仏が来ないと考えられたからでしょう。

ほかの往生伝に鼻毛を抜いている人がいるかどうか調べたのですが、見つかりませんでした。ただし、掃除をしてから死んだとされた人はいます。部屋が汚いと阿弥陀仏が来ないと考えられたからだと思います。また、必ずと言って良いほどに行われたのが、沐浴と浄衣への着替えです。やはり、清潔でないと、来迎がないかもしれないと考えられたためでしょう。沐浴と着替えについては、僧だけではなく、貴族も行っていました。たとえば、藤原道長もそうです。

日本の往生伝は、そもそも中国の往生伝をもとにしています。ただし、中国の往生伝には日本の往生伝ほどには臨終時の沐浴について書かれていません。中国の往生伝と日本の往生伝には若干の違いがあります。日本人が往生のために清潔であることが必要であると考えたのに対し、中国ではそのような意識は希薄な傾向があります。少なくとも中国の往生伝には、鼻毛を抜いてから息を引き取ったとする事例は見つけられませんでした。

日本では、往生への不安は非常に強かったと考えられます。『首楞嚴院二十五三昧結縁過去帳』でも、源信は死後に弟子の夢に出てきて、「往生できた」と告げますが、極楽往生の中でも一番下の位である下品に往生したと言ったと書かれています。『往生要集』を著した源信であるにもかかわらずです。極楽往生するのは容易ではないと考えられていたことが分かります。經典で説かれていることと実際の信仰には、若干隔たりがあるのが面白いところだと思います。

ちなみに『首楞嚴院二十五三昧結縁過去帳』の、夢の中の源信と弟子との会話が面白いです。弟子が夢の中で、「私は往生できると思いますか」と源信に聞きます。そうすると、「ちよつと無理だと思うよ」と、源信が答えます。「なぜ無理なのでしょうか」と尋ねると、「怠慢だからだよ」と答えます。極楽往生することはなかなか難しいということ、源信が強調している場面は、当時の信仰を考える上で興味深いところです。

次に、臨終正念が難しいと考えられていたことについてお話します。藤原道長は平安時代中期に栄華を極めたことで知られています。その死に際は遠縁にあたる藤原実資の日記『小右記』に記録されています。『小右記』によると、万寿四年（一〇二七年）春、モノノケによる病を患って泣き叫んだ、とあります。いい年をした大人が病気になって泣き叫んだというのは少々おかしいと思いますが、モノノケによる病を患うとこういうことがよく起ると考えられていました。モノノケの正体は、多くの場合、死霊です。道長は権力者ですから、当然のことながら政敵が多かったです。本人としても、恨みを買っている自覚があったはずです。だから、モノノケによる病を頻りに患ったとされています。万寿四年春に道長がモノノケによる病を患う前には、娘がモノノケによる病を患って亡くなっています。道長は、自分が恨みを買ったせいで、娘まで殺されたと考えました。実際はそうではなく、疫病などで亡くなったのだらうと思いますが、この時代は陰陽師の占いによって病氣の原因が特定され「病氣の原因は、モノノケだ」と言われたらそのように考えられました。

万寿四年の春以降、道長の病は悪化し、十一月十三日には危篤状態になり、沐浴をして念仏を唱えた、と『小右記』に記録されています。現在、多くの場合、臨終に近い人は沐浴をしません。沐浴は体力を奪ってしまうからです。しかし、この時代は沐浴によって死期が早まったとしても、体をきれいにしておく必要があります。阿弥陀仏に迎えに来てもらうためです。危篤状態の道長は、多分、もうこれで終わりだと思ったのでしょう。ですが、どんなに具合が悪くても、自分の死の時を正確に予知できるわけがありません。沐浴後の道長の念仏を耳にした人々によって「道長は入滅した」という噂が流れます。しかし、実際には、すぐには亡くなりませんでした。その後も危篤の状態が続き、十一月二十一日には下痢がひどく飲食もできなくなり、背中の腫れ物に苦しむものの、道長は医療を拒否したそうです。

十一月二十四日になり、また入滅したという噂が立ちます。十一月二十五日に、道長は法成寺阿弥陀堂に移りました。『往生要集』には、臨終のときには日常生活を営む場所から阿弥陀仏像がある「無常院」に移り、死を迎えるようにと書かれています。道長は、『往生要集』に従って臨終の時を迎えようとしたのでしょうか。なぜ臨終時に移動するのかというと、執着の心が起こるのを防ぐためです。現在は、亡くなるときに妻子が立ち会えたほうが良いと考える風潮があります。しかし、この時代は近くに居てはいけないのです。

十一月二十九日に、道長の意思ではありませんが、陰陽師による招魂祭が行われました。招魂祭は病氣治療の一種です。この時代は、重篤な病気になるとう口から魂が抜け出ていくと考えられていました。魂が口から抜け出て戻ってこなくなったら死が訪れます。魂が抜け出てすぐに死ぬわけではありません。

魂は、結構簡単に抜け出ていきます。たとえば、恋をしても魂は勝手に抜け出ていきます。これについては、古くは『万葉集』にも書いてあります。「親が恋人と会ってはいけないと言ったけれど、魂だけは口から抜け出ていて会えた」という歌があります。

十二月二日には、医師が背中の中腫れ物に針治療を施し、道長はうめき声を上げた、と『小右記』に記録されています。残念ながら、このうめき声が史料に記録された道長の最後の声です。「南無阿弥陀仏」ではなかったのです。

十二月四日明け方に道長は入滅しました。『小右記』を読む限り、念仏を唱えたのは亡くなるだいたい前日の十一月十三日です。臨終時の念仏とは言えません。沐浴をしたのもだいたい前なので、十二月四日の時点で体が清浄な状態だったかという、そうではないと思います。沐浴をして掃除をして念仏をして息を引き取るというのは、なかなか難しいことが分かります。

この時代の貴族の日記には、亡くなった人の死について書かれることがあり、「念仏を唱えて亡くなった。

往生間違いなし」という記事もあります。けれども、大概の人は「亡くなった」ということや、死亡時の年齢しか書かれていませんので、臨終正念はなかなか難しかったことが分かります。

藤原道長よりも少しあとの時代の源頼朝も、後述するように、臨終行儀に興味があったと考えられます。臨終正念した漁師の話を聞いて非常に感動したというのが鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』に出てきます。しかし頼朝は、落馬した後に二週間ほどで亡くなります。念仏を唱えられたとはとても思えませんし、唱えたという記録もありません。やはり、臨終のときに十念するのが難しいことは間違いありません。

三、臨終正念を試みた者たち

京都女子大学の近辺には、三十三間堂など、後白河法皇（一二七〇―一九二二）のゆかりの場所が多いですね。後白河法皇は信心深く、臨終時に何とかして極楽浄土に行こうと試みた人間の一人です。

後白河法皇の臨終時には、善知識という臨終の作法を教える僧が招かれました。臨終のときに、「さあ、念仏を唱えなさい」とか、「ここでこうやりなさい」とか指示をしてくれます。

皇族、貴族の臨終時には善知識が呼ばれることが多いです。後白河法皇の臨終時にも、善知識が呼ばれています。後白河法皇は、「十念具足、臨終正念、顔は西方に向け、手には定印を結んだ」と関白九条兼実の日記『玉葉』に記録されています。定印というのは密教の印です。『往生要集』には密教の印を結ぶ必要があるとは書かれていません。つまり、十念、十回念仏を唱えることと、臨終正念は『往生要集』に倣っていますが、それだけではなく印も結んだほうが良いだろうと考えたのでしょう。兼実は『玉葉』に、「のちに聞いたところによると、西方をお向

きにはならず、南東を向いていたということである」とし、「すこぶる微笑をしていた」とも書いています。その上で兼実は、「疑ってみることに、天に生まれた相だろうか」と、意地の悪いことを記録しています。つまり、極楽浄土には往生できなかったのではないかと書いているわけです。

九条兼実は、後白河法皇のことをあまり良く思っていなかったのも、こういうことを記録に書いたのだと思います。ちなみに『吾妻鏡』には、後白河法皇は、「高声念仏」を七十回もして座ったまま眠るように亡くなった、と書かれています。鎌倉にはこのように伝えられ、極楽往生を遂げたことが強調されたのでしょう。

『吾妻鏡』建久九年（一一九四年）五月二日条には、由比ヶ浜の漁師の往生際について書いてあります。漁師は、日々殺生をしています。『吾妻鏡』には次のようにあります。

「由比ヶ浜の辺りに住む老いた漁師が突然亡くなった。往生のめでたいしるしがあり人々がこぞって見ると、漁師は姿勢を正して座り合掌し少しも動揺しなかった。源頼朝がこのことを聞いて喜び御家人を通じて尋ねたところ、この漁師は、日頃から漁によって生計を立てているものの、漁をしている間も阿弥陀の宝号を唱え怠らなかったという。これを聞いた頼朝は、感心し象牙を下賜し、「漁夫の遺跡で亡きあとを弔うように」と言ったと記されています。

由比ヶ浜の漁師の往生際に頼朝がこれだけ感動したのはなぜかというと、殺生をなりわいとしているにもかかわらず往生できたからだと思います。殺生を生業としていた漁師を、自分と重ねたのでしょう。頼朝も人をたくさん殺していますから、やましさがあつたはずで。

頼朝は、間接的ながら弟の源義経も殺しています。また、平家も滅亡させているので、怨霊を非常に恐れていた。そういうことがあり、殺生をなりわいとする罪深い者でも往生できた事例があることに非常に興味を持ち、『吾

妻鏡』にも記録されたのではないでしょうか。

次は、法然の弟子の津戸三郎為守（一一六三～一二四三）についてです。法然は親鸞の師にあたり、のちに浄土宗の開祖とされます。六十歳以降の法然は、日頃の念仏を行っていれば臨終行儀は不要である、と説きました。しかし、弟子たちは臨終行儀に執着したようです。

津戸三郎為守については、親鸞編（または転写）『西方指南抄』に「津戸は八十一歳で自害してめでたく往生を遂げた。故法然上人往生の年であるから、したのである」とあります。さらに、「もしかしたら正月二十五日などであったのだろうか。詳しく尋ねて書き付けねばならない」とあります。

なぜ自殺をして往生を遂げるのかというと、やはり臨終正念が難しいからです。難しいから、「臨終正念をして自ら死ねばいいのではないか」、「集中して念仏を唱えて入水すればいいのではないか」という考えが出てきます。この時代には入水して往生しようとしたことは時々あったようで、説話でもこのような話が語られています。

津戸三郎為守の自害往生については、『九卷伝』という伝記に詳しく書かれています。それによると為守は、腹を切ったあと、腹の中の臓器を出して袋に詰めて使いの童子に、「これを川に捨ててきてくれ」と言います。夜で暗かったので、童子は、まさか中身が臓器だとも知らずに捨てに行きました。普通であれば、腹を切り臓器を取り出した時点で死ぬはずですが、死にません。

為守は自分がなかなか死なないのでおかしいと思い、「うがいの水のせいだろうか」と考え、うがいもやめます。うがいをやめたところで中身の臓器がないので、うがいの水も何もあったものではありませんが、とりあえず臓器を出してしまつて何も食べていないし飲んでもいない状態でした。それにもかかわらず、傷も治ってしまったそうです。

為守は、正月一日にはいつも臨終の儀式をして備えていたので、正月一日に往生するのかと期待しましたが死にませんでした。結局、一月十三日、夢に法然が現れ、「十五日の午の刻に迎えに来ますよ」と告げます。そのお告げ通り、為守は亡くなったということです。どこまでが真実かは分かりませんが、往生を遂げるために自害をしたのは事実でしょう。

ただ、『九卷伝』には「傷が治った」と書いてあり、普通に考えてこれはあり得ない話でしょう。おなかを切ったら苦しいですから、やめておけばよかったと思うはずです。それを妄念と言います。妄念が起きなかったことを示すためには、傷が治って臨終正念をして亡くなったことにしなくてはいけません。だから、このような伝記ができました。

『法然上人絵伝』（知恩院所蔵）には、津戸三郎為守の往生の場面が描かれています。津戸三郎為守は水も食べ物もずっと摂取していませんから、痩せて骨が浮き出ています。座って念仏を唱えているときに阿弥陀仏が迎えに来ました。為守の額に向けて放たれている光は、阿弥陀仏の白毫からの光です。阿弥陀仏が来迎したことが示されています。絵の上のほうには紫雲が描かれています。紫雲は、来迎のしるしだと考えられていました。

四 親鸞と臨終行儀

親鸞は往生をどのように説いていたのでしょうか。親鸞は、「往生は、臨終の瞬間ではなく信心を得たそのときに確定する」と説きました。ここは親鸞の教えの革新的な部分の一つです。臨終をどうやって迎えようかと皆が悩み、人によっては自害往生までしました。そういう中で親鸞は、「臨終行儀は自力の行者が行うものだ」と説き、

臨終行儀を否定しました。

親鸞が弟子に宛てた手紙（建長三年〔一二五一年〕閏九月二十日付書簡、『末燈抄』第一書簡）に、「来迎ハ諸行往生ニアリ、自力ノ行者ナルガユヘニ。臨終トイフコトハ諸行往生ノヒトニイフベシ。イマダ真実ノ信心ヲエザルガユヘナリ。（中略）真実信心ノ行人ハ、摂取不捨ノ心ノサダマルトキ往生マタサダマルナリ。来迎ノ儀式ヲマタズ」とあります。「真実の信心を本當に得たのであれば、そのときに往生は定まるのであって、臨終のとき何とかしようとするのは自力の行者がすることです」ということです。

たしかに、親鸞が臨終行儀をした形跡はありません。やはり確固たる信心があつたからなのでしょう。親鸞は、臨終行儀が当然のように行われた時代の中で、臨終行儀をはっきりと否定しました。親鸞の教えの中でも革新的な箇所の一つです。

五、妻恵信尼の臨終への考え方

親鸞には恵信尼という妻がいました。恵信尼は、臨終のありようについて、どのように考えていたのでしょうか。晩年の親鸞と恵信尼は別居しており、親鸞は京都に、恵信尼は越後国（現在の新潟県）に住んでいました。恵信尼の信仰は、末娘覚信尼宛ての書簡からうかがい知ることができます。

文永元年（一二六四年）の『恵信尼文書』（第七通）には、「生きているうちに卒塔婆そとばを建てたい」と記されています。また、五重の石の塔を七尺の高さに注文したと書かれています。前年に飢饉があり、息子である益方の子やそれ以前から居た幼い子どもたちなどがたくさん同居しており、彼らを餓死させまいと思うから、着物もろくに着

することもできない生活であったとされています。生活は苦しかったようです。

経済的に困窮する中でも、「七尺（約二・一メートル）の五重の石塔を造りたい」と、恵信尼は書いています。同年の『恵信尼文書』（第八通）でも、「生きている間に建てたいと思うけれども、建つ前に死ぬようなことがあれば子どもたちに建ててもらいたいと思う」としたためています。何のために五重の石塔、五輪塔を建てようとしたのかというと、この時代は、自身の極楽往生を願うために五重の石塔を結構建てましたから、そのような目的だった可能性があります。

文永四年（一二六七年）九月七日の『恵信尼文書』（第九通）には、覚信尼が小袖を送ってくれたことに対するお礼がしたためられています。手紙を読む限り、恵信尼と覚信尼は離れた場所に住んでいても心が通い合う親子であり、母は娘を思い娘は母を思っていたようです。恵信尼は、「孫にも会いたい」とも書いていますから、覚信尼と非常に良好な関係を築いていたことが分かります。

覚信尼は、越後国に住む恵信尼の生活を非常に心配していたのでしょう。いろいろなものを送っており、そのうちの一つが小袖でした。この時代では小袖は高級品です。しかも、複数送っています。

恵信尼の手紙には、それに対する礼がしたためられており、「今は死に装束として着る衣があることがうれしい」と、書かれています。死ぬときの衣にこだわりのあったことが分かります。この時代は、臨終時に何を着ていたのが重要でした。

「この時代」と申しましたが、これよりもさらに三百年ぐらい前に源信が『往生要集』を書いていきます。もちろん三百年前から、沐浴をしたうえで清潔な衣に着替えています。源信の時代から衣は大事でしたし、鎌倉時代でもどんな衣を着て死ぬかが重要でした。やはり清潔な衣であることが重要だったのだらうと思います。

ただ、恵信尼の手紙から、良い衣であることも重要だったのだろうと考えられます。文永五年（一二六八年）三月十二日の『恵信尼文書』（第十通）には綾の小袖を送ってもらったことへの礼が述べられています。「今となつては臨終のときを待つばかりですから、この小袖が最後だろうと思われます」としたうえで、覚信尼からもらった綾の小袖をこそ臨終のときに着ようと思い取り置いている、と書かれています。なぜ臨終時の衣にこれほどこだわるかというと、衣の良し悪しによつて往生の可否が決まると考えられていたからでしょう。

法相宗や真言宗を兼学した学僧湛秀（一〇六七―一二二年）による臨終行儀書『臨終行儀注記』には、「臨終時の衣服は美麗なものはやめるべきだ」と書かれています。つまり、美麗な服を着て死のうと考えた人が多かったのでしょう。

さらに『臨終行儀注記』には、「美麗なものであれば執着が増すし、粗悪なものであれば往生の道への妨げになつてしまふだろう」とも書かれています。美麗な衣も粗悪な衣も駄目ですから、なかなか難しいですね。臨終時の衣は大変なこだわりをもつて捉えられていたことが分かります。

だからこそ恵信尼は、「臨終時に自分が着る衣はあなたがくれた綾の小袖にします」と娘に述べたのでしょう。このとき、恵信尼は非常に貧しかったのです。その理由は記されていませんが、恵信尼の所には孫にあたる子どもたちが居ました。その子たちを養つてやらなければいけません。小袖も売れば相当の食料と換えられるのでしょすが、それはする気はなさそうです。臨終時の衣にこだわりを持つことは、当時においては一般的なことでした。

親鸞は、「臨終時の様子がどうであれ、信心を得たその瞬間に往生は決定する」と述べていますが、これは非常に革新的な教えであつて一般的ではなかったと言えます。やはり当時は、極楽往生を遂げるため、臨終時の衣にこだわつたり石塔を建てたりするのが一般的でした。

六、妻子が臨終の場に居ると不都合か

現在では、「妻と子どもに手を握られて亡くなりました」というと、幸せな最期だったかのように聞こえますが、鎌倉時代には必ずしもそうではありませんでした。

たとえば、武士の北条時頼（一二二七―一二六三年）の往生際を見ていきたいと思います。北条時頼は鎌倉幕府六代執権です。禅に傾倒して建長寺という非常に大きな寺を鎌倉に創建し、蘭溪道隆を開山としました。時頼の死は『吾妻鏡』に記されています。時頼は、死ぬ間際に、かつて建立した最明寺の北亭に移りました。日頃生活している場ではなく特別な場、つまり『往生要集』で説かれている「無常院」です。時頼は、そこで、看病のために信頼のできる家臣を七人集めて亡くなりました。

時頼は、臨終時、最明寺の北亭には妻や子どもは入れていません。信頼できる武士、家臣だけです。信頼できる者たちに見守られて死ぬことは重要でした。ただし、妄執をかき立てるような妻や子どもがいてはいけません。時頼は、禅に傾倒していましたから、座禅をくみ、印を結んで亡くなった、と書かれています。

『吾妻鏡』は鎌倉幕府の歴史書なので、当然、時頼の往生際を理想化して書いていることでしょう。時頼が実際にどのように亡くなったのかは、もはや分かりませんが、『吾妻鏡』にこのように書かれているからには、やはり死ぬ瞬間へのこだわりは強かったのではないかと考えられます。

臨終のあり方にこだわりをもって亡くなったとされているのは、時頼だけではありません。たとえば、承久の乱で後鳥羽上皇と戦った北条義時も、やはり印を結んで亡くなったとされています。印を結んで死ぬ必要があるとは

『往生要集』には書かれていませんが、『往生要集』に記されたことは、それぞれの信仰にもとづき変えられながら受容されていったようです。

仏教説話集の『沙石集』には、臨終時に妻が傍らにいたために往生に失敗した僧の話があります。ある山寺に僧侶がいました。本来ならば、僧侶は結婚してはいけません。仏教には不淫戒、女性と交わりを持つてはいけないという戒があるからです。しかし、日本では古代から、多くの僧侶が隠れて女性と交わりを持ち子どもをもうけていました。「隠れて」というのは、みんな知っているけれど公然とではないという微妙なところで、いかにも日本らしいものです。

『沙石集』に出てくるこの山寺の僧には、妻がいました。僧は、病気になったときに妻に世話をしてもらい、「妻がいなかったらこんなにかいがいしく世話をしてもらえなかった。妻を持って本当に良かった」と思いました。ところが、臨終時に大変なことが起こります。僧は、臨終正念をしなくてはいけないので、「そろそろ死がせまっているから念仏を唱えよう」と思います。念仏を集中して唱えようとしたところ、なんとしたことか、妻が「私を捨ててどこに行くの、ああ、悲しい」と叫んで首に抱き付いたのです。念仏を集中して唱えなければいけないのに、首に抱き付かれてしまったら困ります。僧は、「やめてくれ、集中して臨終させてくれ」と言いますが、妻は言うことをなかなか聞きません。また同じように叫んでは抱き付きます。僧は何度も起き上がって念仏をしようとしたものの、最期は引き倒され抱き付かれたまま事切れました。こんなことで往生できたわけがありません。臨終のときには、やはり妻が障害になってしまったという話です。

今の話に関連して、江戸時代（近世）の刷り物を紹介します。『玉日宮御遺状記』という天明六年（一七八六年）に刊行された本です（「永田調兵衛（西本願寺御用書林）、黒石七兵衛・丁子屋九郎右衛門（東本願寺御用書林）」）。

この『玉日宮御遺状記』は、おそらくまだ翻刻はされていないのではないかと思います。この本は、恵信尼が形見として書いた「御遺状」という形式を取っています。もちろん、これは江戸時代に作られたお話です。

「玉日宮」とは、のちに親鸞の妻として語られた姫のことです。九条兼実の娘の玉日という姫が親鸞の妻になったというのですが、恐らくこれも伝説です。この本の中では玉日宮と恵信尼とは同一人物になっています。まず、「玉日の本地は六角堂の観音菩薩」と書かれています。さらに、親鸞が越後国に左遷（流罪）されたときに、玉日を都で往生したことにして、三善為教の娘と一緒に東国に下向した、という説明が書かれています。絵の中の真ん中の女性性は「玉日宮」であり、男性は「三善為教」です。

この本は、『玉日宮御遺状記』として浄土真宗関連の東本願寺御用書林から出版されており、浄土真宗の宣伝を目的とした本だといえます。

この本には、浄土真宗が他宗よりも優れていることの一つとして、臨終行儀をせずとも往生できることが書かれています。それを示すエピソードが興味深いので、見ていきましょう。

昔、ある僧が、「臨終時にタニシを食べたい」と言い、妻にタニシをとりに行かせました。どうして食べたいものがタニシなのかはよく分かりません。妻は、夫に言われたとおり、タニシをとりに行きました。すると、妻がタニシをとりに行っている間に、僧は持仏堂に向かい端座合掌して眠るようにして往生を遂げた、ということです。つまり、そろそろ臨終の時である



『玉日宮御遺状記』（小山聡子所蔵）
越後へ流罪

の姿になっています。この絵でも恐ろしい顔です。ゴワとした毛が生えています。



『玉日宮御遺状記』臨終行儀と鬼女

『玉日宮御遺状記』は時々古書店で見かける本です。一冊、大体一万二千円ぐらいが相場ではないかと思っています。一七〇〇年代の本にしてはそれほど高くはありません。それでも、私のケチ根性が出てきて、少しでも安く買いたといういろいろな目録を見て、どれが一番安いかと目を光らせていたところ、八千円というものがありません。

「これは買いた」と思って物も見ずにインターネットで購入したら、非常に残念なことにこの鬼の場面の所に染みが出ていました。だから、安かったようです。「安物買いの銭失い」とはこのことです。

さて、『玉日宮御遺状記』には「自力往生を志す人には、このように恐ろしいことがあります」と書かれています。先ほどの『沙石集』で語られた妻は鬼ではありませんでしたが、結局、妻のせいで往生できませんでした。自力往生を志す場合には、臨終のその瞬間が大事になります。それを失敗すると往生できませんから、大変恐ろしいこと

と悟った僧が、臨終の場に妻がいないう、外に出したのです。僧は、妻にタニシをとりに行かせているときに、集中して念仏をして往生を遂げました。妻が帰ってみると夫は亡くなっていました。妻は大変悔しがって地団駄を踏み、「臨終を妨げることができなかったのが悔しい」と言い、鬼女になって虚空に飛び去りました。つまり、この女性は僧の臨終を妨げてやろうと思って妻になり、死ぬ時を待っていたのでしょう。「臨終を妨げようと思つてずっと居たのに、何て口惜しい」と言つて、鬼女

です。

本文には、「他力往生を志し信心を得た人間であれば、臨終の良し悪しは関係ない」ということや、「妻や子どもが、『悲しい、死なないで』などと涙を流したとしても、往生の障害にはならない」といったことが書かれています。このように、『玉日宮御遺状記』では、自力往生を志す危険性が強調されており、他力信心の重要性を説く親鸞の教えの素晴らしさを強調する内容となっております。親鸞の一流では、妻帯をしても往生できると主張されています。妻帯をする自力の者たちはタニシをとっている間に死ねればいいですが、なかなかそうもいかないものです。タニシをとりに行かせても、妻の帰宅が早ければ無理ですし、なかなか難しいことです。また、親鸞の一流は妻帯の正当性を強調して親鸞の教えが秀でているということを主張します。江戸時代になると妻帯に対する批判などもあったので、あえてここで妻帯を採り上げているのはそういう批判に応える、という意味もあったのではないかと思います。

おわりに

『往生要集』ができてから、臨終の作法や死ぬときのありようが非常に重要視されます。親鸞が生きていた時代も、まさしく貴族や武士たちが臨終正念を志して何とか往生しようとしていた時代です。

それは、『往生要集』に書かれている「臨終の一念は百年の業にも勝る」という考え方に基づきます。日頃の念仏があるからこそ臨終の一念ができるわけですが、臨終時の念仏、臨終正念は大変に重要視されていました。ただし、臨終正念は簡単ではありません。体調の悪い中、念仏を集中して十回唱えることがはたしてできるかどうかです。

人によつてはできたようで、たとえば、藤原定家の父親の藤原俊成は、かなりの老齢で亡くなりますが、最期に法華經を読んで、さらに念仏を唱えて亡くなったと、定家の日記『明月記』に記録されています。そのうえ、横になって亡くなったのではなく、周囲の女房たちにかき起こされ座つたまま亡くなったということです。稀にこういう人もいますので、臨終正念は絶対に無理だということではありません。

しかし、藤原道長の事例などを見ても、相当に難しいことは明らかです。道長は信心深く、晩年には一日に七万回も念仏を唱えたこともありました。念仏をたくさん唱えれば唱えるほど往生できると考えたのでしょうか。それでも、最期はうまくいきませんでした。臨終正念を行うことは、難しいです。

そのような中で親鸞は、「信心を得たその時に往生が決定する」と説きました。当時においては、親鸞は非常に斬新な教えを説いた人間だと言えます。斬新であるが故に、なかなかこのような教えは浸透しにくく理解されにくかったのでは、と思います。恵信尼もそうですが、のちの浄土真宗の人たちの亡くなる場面を調べてみると、臨終行儀に全く無縁であつたかというところでもなく、しばしば臨終行儀の形跡があります。なんとかして極楽往生したいと思えば思うほど、臨終行儀を意識してしまうということになったのかもしれない。

臨終行儀を不要とする教えは浸透しにくかったものの、臨終行儀をしないことは近世になっても浄土真宗の教えの中でも重要な特徴の一つです。浄土真宗の教えにはいろいろな特徴がありますが、そのうちの一つが臨終行儀を不要だとすることです。

今日は、親鸞が生きた時代も含めてその前後の時代に往生際がどう捉えられていたのか、ということについてお話ししました。

ご清聴、どうもありがとうございました。

(終了)

〈キーワード〉

臨終行儀

源信

往生要集

親鸞

恵信尼